

修復する“歓喜”

藤井颯太郎

七日間の微熱が下がったあと街から香りが消えた。ただの風邪だと思っていたけれど、そうでもなかったらしい——。香りを整えることを生業にする僕たち調香師にとって「ただの風邪」でさえ命取りになる。調香師になってからの七年、体調管理を徹底し続け、風邪を引いたことは一度もなかった。

療養期間を終えても、僕は残っていた有給全てを使って、出来るだけ仕事を休み続けた。何が起きているのか、まだ誰にも話せていない。嗅覚を失った調香師は、僕は、これからどうなるんだろう。

この鼻には、どちらかといえば苦しめられてきたことの方が多かった。学校のプールの授業では塩素の匂いでいつも頭痛に悩まされたし、乗り合わせた他人の匂いに耐えきれずバスを降りて遅刻したことも何回もある。兄との関係がごちなくなつたのも、この鼻が原因だった。

一つ上の兄は中学のころ油画に手を染め、三十手前に差し迫つた今も実家に居座り絵を描き続けている。油画の画材の重たい匂いは、僕の家から僕の居場所を奪った。兄の髪や服にまとわりつく匂いに悩まされ、いつしか自然と、家族一緒に食事をすることも無くなつていった。

「久しぶり。結構長いこと仕事休んでるって母さんから聞いた。まだ休み残ってるなら、うち帰ってこいよ。一緒にご飯でも行こう。気が向いたらで良いけど。」

兄から突然メールが届いたのは、ちょうど昼食を食べていた時だった。香りが消えてからの食事は、なにを食べても温かいゴム毬のようで、不味くも美味くもない。ただ昔より、アゴが疲れることばかり気になる。食べない訳にはいかなから仕方なく、ぼんやりと食べる毎日を送っていた。兄からのメールはアゴのだるさを忘れさせてくれた。兄が自分を気にかけて誘ってくれたという驚きもあつたが、メールを読んで誰

かであれば食事が出来そうと思つた自分に一番驚いた。誰かと食事できればアゴの疲れが半分くらいになるかもしれない。昼食を中途半端にラップで隠してメールに短い返事を打ち、家を出た。

数年ぶりに帰つた実家の僕の部屋は、猫に占拠されていた。僕が家を出てから母は、猫好きの叔母に勧められ(ヒメ)という猫を飼い始めた。ズボンをもまみれにしながらヒメに遊んでもらつてしていると「おかえり」と背後から話しかけられた。日が沈み始め薄暗くなった廊下に作業着の兄が立っていた。動物の匂いとか苦手じゃなかったつけ、と続ける彼に「平気になつちゃった」と返事をした。

庭に増築したアトリエを案内してくれている兄は、この数年間など無かつたかのようには饒舌に喋り続ける。キャンバスや画材で程よく散らかつたアトリエの奥から、兄が一枚の小さな絵を持ってきた。彼が油絵を始めた頃に描いた絵で、この部屋では唯一僕をモデルに描いた絵らしかった。笑つてしまうほど神経質な表情でこちらを睨んでいる絵の中の僕をみて、兄の視界から僕がどう見えていたのか、わかつた気がした。僕が絵をじつと見ていると「最近なんかうまくいってるみたいで、良かった」と言われた。兄にとって神経質な表情をしていない弟はうまくいっているように見えたのだろう。それだけなんだと思うが、嬉しかった。

絵を手に取り、改めてゆっくりと眺めてみる。ふわふわと絵の方から風が吹いてくるような良い絵だった。と、その風の隙間に、ほかに油の香りが匂い立った。気がした。その感覚が本当に「香り」だったのかわからないが、あれだけ嫌いだった、あのうんざりするような重たい香りが、懐かしく鼻腔に響いた。僕は嬉しくて「自分の絵を嗅ぐ」という、人生で滅多に経験しない奇妙な行動を何度も繰り返し続け、兄を困惑させた。僕の街に、少しずつ香りが戻ってきました。



写真 齋藤伸一郎

